講談社選書メチエ

738

イスラエルの起源

ロシア・ユダヤ人が作った国

Tsurumi Taro
鶴見太郎

MÉTIER

316.88
151

講談社選書メチエ
738

イスラエルの起源

ロシア・ユダヤ人が作った国

鶴見太郎

横浜市立大学学術情報センター
007302915
受入

MÉTIER

［本書の内容］

序　章　二種類のユダヤ人
第一章　内なる国際関係――自己のなかの複数の民族
第二章　ユダヤ人とロシア帝国――様々な変化
第三章　「ロシア・ユダヤ人」の興亡――相互乗り入れするリベラリスト
第四章　ファシズムを支持したユダヤ人――リベラル・シオニストにとっての国家
第五章　民族間関係の記憶――ポグロムとパレスチナをつなぐもの
第六章　相補関係のユダヤ化――シベリア・極東のシオニスト
終　章　多面的な個が民族にまとまるとき

◉――カバー図版

Vladimir Taburin (1880-1954) による絵葉書
カバー表：左より時計回りに、エスエル、アナーキスト、ボリシェヴィキとメンシェヴィキ、ブンド
カバー裏：労働者党

はじめに

ユダヤ人とイスラエル――どちらも日本では馴染みが薄いが、おぼろげなイメージぐらいはないだろうか。そして、両者のイメージはかなり対極的ではないだろうか。

ユダヤ人といえば、ヨーロッパでの迫害やホロコーストを連想する人は多いだろう。ユダヤ人の具体的な顔に初めて触れるのは、歴史の教科書に登場する『アンネの日記』を通してかもしれない。そこで目にするユダヤ人は、何か手をさしのべてあげなければならないような、かわいそうな人々のように見える。

一方、イスラエルといえば、中東あたりでよく戦争をしている国、小国にもかかわらず高度な軍事力を持っている国というイメージがあるかもしれない。あるいは、先住民のパレスチナ人を抑圧している国というイメージを持っている人もいるだろう。いわば、手を出したら噛まれてしまいかねない戦闘的なイメージだ。

しかしそのイスラエルは、ユダヤ人の国家だとされることが多い。対極的な二つが一緒になっているのだ。

中東の一角、地中海東端とヨルダンのあいだにある、歴史的にはパレスチナと呼ばれてきた地域にイスラエルは位置している。一九四八年に建国された比較的新しい国だ。それまでこの地域は久しく

オスマン帝国の支配下に置かれ、ムスリムを中心とするアラブ人が暮らしていた。

現在、イスラエルの全人口約九〇〇万人のうちおよそ六五〇万人はユダヤ人（ユダヤ教徒）である。その他の大半は、昔から暮らしてきたアラブ人（パレスチナ人）のうち、イスラエル独立時に起こった戦争の後も残った人々だ。イスラエルの独立宣言には、イスラエルが「ユダヤ的国家」であることが明記されている。

「ユダヤ人」を定義することは、他の「〇〇人」と同様に「科学的」（少なくとも生物学的）には不可能だが、現在では、基本的には自らをユダヤ人・ユダヤ系と考える人を指し、多かれ少なかれユダヤ教やユダヤ人の歴史とのつながりを見出している人々であることが想定されている。現在ではユダヤ教をあまり実践しない人のほうが多数派だ。

この定義に基づくと、現在の世界のユダヤ人口は、やや抑制的に見積もってもおよそ一五〇〇万人になる。イスラエルに次いでユダヤ人口が多いのは、六〇〇万人弱が暮らすアメリカであり、イスラエルとアメリカがユダヤ人口の二大拠点になっている。三位以下の人口数は桁が一つ減り、フランス、カナダ、イギリス、アルゼンチン、ロシアと続く。ちなみに日本には一〇〇〇人ほどが暮らしているとされる。

ではロシアと聞いてヨーロッパを連想するのは的外れかといえば、それは時期による。ソ連崩壊直前は、アメリカに次いで多かったのはソ連であり、ホロコースト以前まではさらに多く、ロシア・東欧地域こそがユダヤ人口の中心だった。二〇世紀初頭では、世界のユダヤ人口約一一〇〇万人のおよそ半数が、ロシア領ポーランドを含むロシア帝国に暮らしていた。

一九世紀終わり頃からアメリカやパレスチナなどにユダヤ人が移住し始め、ホロコーストによる破

滅やソ連崩壊の混乱を経て、前記の人口分布になった。

現在のユダヤ世界はかつてないほど多様化しており、イスラエルのユダヤ人でも伝統的なユダヤ教のスタイルを守り続ける人々がいる一方で、歴史的経緯の異なる中東・アフリカのユダヤ人も特に建国後に多く移民し、今では同国ユダヤ人口の半分を占めている。

アメリカのユダヤ人についても、イスラエルとの関わり一つとっても、例えばトランプ大統領の娘婿ジャレッド・クシュナーのように強靭なイスラエル国家を支持するユダヤ人もいれば、それに批判的なユダヤ人、さらにはイスラエルの存在そのものに反対するユダヤ人もいる。ユダヤ教に対する立場も実に様々だ。ユダヤ教の師である「ラビ」は歴史上長きにわたって男性に限られてきたが、アメリカでは女性のラビがいる改革派もあれば、世俗社会と自集団を遮断して独自の地域共同体を築く極端に伝統主義的な一派もある。

他のディアスポラ（離散）のユダヤ人も同様に多様で、ソ連崩壊後にイスラエルに移民したユダヤ人は、無神論のソ連でユダヤ教とはかなり離れてしまっていた人々だった。移民の理由もイスラエルのあり方に共感したというよりも、経済的理由によるところが大きい。

こうした多様性を鑑みると、先に挙げたユダヤ人とイスラエルに関するイメージは、非常に一面的であることがわかる。だが、特に、パレスチナへの移民が始まった一九世紀終わりから、イスラエルがつくられていった二〇世紀半ばまでの時期に重きを置いて歴史を大局的に見るなら、イメージの対照性はあながち間違っていないのだ。

紀元一世紀にローマ帝国に敗れて以来、一九世紀までのディアスポラの歴史のなかでユダヤ人が迫

害に対して武器を取って立ち向かったケースは非常に限られている。基本的には嵐が過ぎ去るまで堪え忍ぶという姿勢でユダヤ人は一貫していた。

一方、イスラエルは、建国以来何度も隣接するアラブ諸国と戦火を交え、支配地域内のパレスチナ人にも容赦がない。公言はしていないが、イスラエルは核保有国だと噂される。男女ともに兵役があり、過去四度にわたる中東戦争をはじめ、その数々の軍事作戦は世界に大きなインパクトを与えた。

近年では、ガザ地区のハマース（「イスラーム過激派組織」とされる）の徹底的な弾圧のためにはパレスチナ市民の犠牲や困窮を厭わない姿勢で国際社会から非難を浴びている。イスラエルの軍事技術やセキュリティ製品に対する注目度も高い。

では、このように対極的なユダヤ人とイスラエルは、いったいどのような経緯で重なっていくことになったのか。

この問いに対しては、ここまでに記してきたことでもある程度は予測がつくかもしれない。一九四一年頃からユダヤ人殲滅へと向かったホロコーストで民族存続の危機に瀕したユダヤ人が、ついに目覚めてイスラエルを建国し、自衛を徹底するようになった、という筋書きである。

だが、ユダヤ人国家をつくろうという運動＝シオニズムは、実はホロコースト以前からすでに本格化しており、パレスチナや国際政治においてそれなりの基盤を築いていた。その頃に運動の中枢を担っていた人々がイスラエルを建国し、アラブ諸国と戦闘を繰り広げていった。

ホロコーストが起こったからといって、そうした動きの大勢が大きく変わったわけではない。ホロコースト以降の現在でも、世界のユダヤ人の過半数がイスラエル外に住んでいるように、イスラエルに行かなかったユダヤ人のほうが多かったのだ。

ホロコーストが世界のユダヤ人に多大な影響を与え、イスラエル建国を後押ししたことは間違いない。しかし、イスラエルを担ぐことになったユダヤ人の軍事的な志向性の高さについては、必ずしもその説明とはならないのである。

むしろ、ホロコーストより以前、特に一九世紀の終わりぐらいから始まっていたユダヤ人のあいだでのある変化が、彼らが国家という形で自衛を徹底していくうえでの大きな前提になった。それはどのような変化だったのか。本書が解き明かすのはこの点である。

以下、序章では、この変化についてもう少し敷衍し、第一章では、その背景を探るための道具立てを提示する。第二章では、本書の舞台になるロシア帝国とそのユダヤ人に関する基本情報を示し、以下、第三章以降で、ユダヤ人の姿を具体的に追っていく。

第三章ではまずロシアと最も密接につながっていたリベラリスト（自由主義者）に登場してもらい、第四章ではシオニスト、ただしリベラリストとの共通性をある程度持っていた人物を紹介する。第五章では、ユダヤ人として孤高に生きることを志向するようになったシオニストについて、第六章では、ロシアのなかでの独自性からユダヤ世界のなかでの独自性を追求する形に路線変更したシベリア・極東のシオニストについて議論し、上記の変化を多角的に考えていく。

目次

はじめに 3

序章 二種類のユダヤ人 13

第一章 内なる国際関係 自己のなかの複数の民族 27

1 リベラリズムとリアリズム 28
2 自己を分解して考える 35
3 諸側面の関係性 39
4 関係性の主要なパターン 42
5 関係性は何で決まるか 54

第二章 ユダヤ人とロシア帝国 様々な変化 61
1 マイノリティとしてのユダヤ人 62
2 近代における変化(1)——思想的変化 70
3 近代における変化(2)——社会経済的変化 75
4 近代における変化(3)——政治的変化 80

第三章 「ロシア・ユダヤ人」の興亡 相互乗り入れするリベラリスト 89
1 「ロシア・ユダヤ人」というアイデンティティ 90
2 ユダヤ人と経済 101
3 ポーランドとの関係 106
4 ロシア人の反応 110
5 一九一七年革命とユダヤ人 116
6 内戦と亡命 121

第四章 ファシズムを支持したユダヤ人 リベラル・シオニストにとっての国家 135
1 ユダヤとロシアの邂逅 136
2 シオニストとしてのパスマニク 140
3 社会経済学的シオニズム 148
4 カデットのパスマニク 154
5 君主主義の亡命ロシア人 160
6 ロシアとユダヤの複雑な関係 174

第五章 民族間関係の記憶 ポグロムとパレスチナをつなぐもの 181
1 リベラリストとシオニストの論争 182
2 ポグロムの影 185
3 ポグロムの理解 190
4 ポグロムの記憶のパレスチナへの投影 201
5 ポグロム被害者のオリエンタリズム 208

第六章 相補関係のユダヤ化 シベリア・極東のシオニスト 213
1 シベリアのシオニスト 214
2 ハルビンへの亡命 227
3 シベリアとシオンの結節点 235
4 地方アイデンティティとユダヤ世界での自己完結 243
終章 多面的な個が民族にまとまるとき 249
注 263
文献一覧 269
初出一覧 286
あとがき 287

序章

二種類のユダヤ人

MÉTIER

長らく迫害された末、ナチスのホロコーストに直面したユダヤ人——
苦難の歴史を背負う人々は、一九四八年、ついにイスラエルを建国した。
だが、その国家は強大な軍事力を備え、
アラブ人を攻撃する好戦的な姿をわれわれに見せ続けている。
特異な国家が生まれた理由を解き明かすには、
マクシム・ヴィナヴェル、ダニエル・パスマニクといった
知られざるロシアのユダヤ人に迫る必要がある。
膨大な資料を渉猟し、該博な知識に裏づけられた考察で
気鋭の著者が歴史の謎に迫る、渾身の意欲作！

9784065215715

1920322018509

ISBN978-4-06-521571-5
C0322 ¥1850E (0)

定価：本体 1850 円（税別）

学術情報センター
00730291 5
横浜市立大学

鶴見太郎（つるみ・たろう）

一九八二年、岐阜県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。現在、東京大学大学院総合文化研究科准教授。専門は、エスニシティ・ナショナリズム論、ロシア・ユダヤ史、シオニズム、イスラエル・パレスチナ紛争。

主な著書に、『ロシア・シオニズムの想像力』（東京大学出版会。東京大学南原繁記念出版賞）、『ユダヤ人と自治』（共著、岩波書店）、『社会が現れるとき』（共著、東京大学出版会）など。

イスラエルの起源

ロシア・ユダヤ人が作った国

二〇二〇年一一月一〇日　第一刷発行
二〇二四年　二月　五日　第四刷発行

著者　鶴見太郎
©Taro Tsurumi 2020
発行者　森田浩章
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二―二一　〒一一二―八〇〇一
電話（編集）〇三―五三九五―三五一二
（販売）〇三―五三九五―五八一七
（業務）〇三―五三九五―三六一五

KODANSHA

装幀者　奥定泰之
本文印刷　株式会社新藤慶昌堂
カバー・表紙印刷　半七写真印刷工業株式会社
製本所　大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、「選書メチエ」あてにお願いいたします。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。㊐〈日本複製権センター委託出版物〉
ISBN978-4-06-521571-5　Printed in Japan　N.D.C.230　290p　19cm